

第4章 分離：マクロに見る

せっかく文型がわかっても、実際に目にする英文は、英文法の本の例文に出てくるような短い単純なものではない。そこには修飾語という名の枝葉末節が紆余曲折しているのである。この英文というパズルをいかに解いていくかが正しい英文解釈ということなのだが、極論を言えば、複雑な英文の骨組みをとらえて、単純な一本の太い幹を見つけ出すことがコツと言える。

短文なら理解できるのに、長文となると急に難しく感じるのは、五文型という太い幹の間に、修飾語句という小枝が入り込むからである(挿入)。そして、五文型の間を引き裂くのだ(分離)。例えば、次の英文を正しく訳してみよう。

The concept of time, for example, was implicitly thought until this century to be the same for any observer, anywhere, but Einstein showed that time was strictly a local matter. [1995年前期・下線部]

for example の前後にカンマがあるので、この挿入はすぐ見破れるとしても、century の次の to be の解釈を間違えていないだろうか。to be 以下を「～であるために」と訳したり「～であるための」と訳して century に修飾させたりしていたら誤訳である。think は **think + O + to be** ～「O を～であると考え」という語法があり、これが受動態になると **be thought to be** ～「～だと考えられている」となる。この thought と to be の間に until this century が入り込んで全体を見にくくさせている。このように、間が空いて文の要素が離れるとわからなくなるというのが大半の英語学習者の教訓である。こういった分離現象を見破るためには、think の語法自体をしっかりと把握していることもさることながら、英文が複雑になって見失ったら、until this century のような〈前置詞＋名詞〉をかって括るというような作業が必要になってくる。

この章では、どのような分離が起こるのかを探っていくことにしよう。

【訳例】

例えば、時間の概念は今世紀までは誰がどこで観察しても同じであると暗黙のうちに了解されていたが、アインシュタインが時間は厳密には局地的なものであることを証明した。